

## 宿善（二）

甲「生活すなわち信仰だと聞きますが、その意味がはつきりいたしません。そして私には信仰がちつとも生活に生きていません。お導き願いたいと存します。」

乙「ああそうですか。それは大切なことであります。考えさせていただきましょう。それで第一に考えておかなくてはならぬことは、如来の全体を聞くということにどれだけ重きをおかれたかということ。そして聞くということは、ただたんに聞くということではなくて、話として聞き流すということではなくて、如来の真実、大慈悲全体が私たちの人格の全体にとどききるといふこと、その一念の信に、自力やほかから打ちくだかれて、人格的な大革命をよびおこすことでもあります。自力、小我の迷妄中心の生活から、真実如来の中心の生活に転回することが一念の信の相であります。聖人が一念の信を絶対に尊重し、高調して、迷悟の分水嶺にされたことには深い如来の智慧が光っています。そしてその一念こそ、前念命終、後念即生として、長き生死の迷いを打ちきり、正定聚不退の身となり、現生さながら、浄土の大衆となるのだというすぐれた決断がされています。」

甲「待つてください。死んでお浄土にゆかしてもらうのが真宗ではないのですか。この世は、いずれ苦しみで迷いですから。」

乙「それが今までの浄土真宗でした。しか浄土真宗はそんなものではなかったのです。少なくとも聖人の宗教はそんな未来一点張りで現実に関係のないようなものではない。真宗は二益であります。二益とは、正定聚（菩薩）と滅土（仏）とがそれであります。しかし、その正定聚と滅土とは、因と果、すなわち、暁と昼との関係であつて、正定聚の中から必然に滅土があらわれてくるのです。ですから正定聚をはなれて滅土はありません。だからとて滅土をさきに考えて、それに至るために正定聚に入ると割り出したのでは、真実のものを体験することはできません。問題はまず、今日、今、真実に如来にふれてゆくことでもあります。」

甲「わかりました。ですが、そこで信仰がどう生きるのですか。」

乙「あなたが生きるのではなくて、如来が生きているのであります。あなたは生かされるのであります。自己を知るといふことも、廻心懺悔も、感謝も、合掌もすべて如来なくしてはありません。言いかえると、如来の本願は、そのまま衆生の道義そのものになつてくださるのであります。」

甲「私もは、長い間、信心とこの世の生活とを二つに別けていました。そうして先生のような説き方をする方がだんだんと多くなるのを見て、自分の間違いは棚にあげておいてこれは悪いことだご講師の方へけちをつけていました。まことにありますまぬことであります。」

乙「よいことにお気がつきました。今日の家庭生活でも、言いたいことを言い放し、したいことをし放題にして、それには法の相も機の深信も関係なく、寺の本堂や、御仏前だけで、悪人の凡夫のと言いつつも、世の中ではちつとも悪人でも凡夫でもなく、我慢の醜い姿の横行闊歩、いざ業の大波に出会えば、金剛の心もどこへやら、罪障の重荷もすてて逃げようとして、ますます深い地獄におちてゆく、それをつか

れると、これが凡夫じゃ、と言いわけする。人を高い所かち見下して、われ一人得たり賢しとなり、十年も二十年も昔の、涙が出たとかびつくりしたとかの、枯木のような型を後生大事と握りしめ、それを聞かされる時だけよい説教、それにあわねば異安心、とどのつまりは、自分勝手が通したいばかり、これでは世の中の害毒にこそなれ、どこに生き如来がまししょう。ちくりちくりとこうしたたげた腰掛けからたたき出されて、真実の撰取不捨の光明界に出されるようなお話が大きらい、叱られたら真赤になつて邪見の角をはやし、お前はよいお同行じゃ、妙好人じゃといわれる甘い言葉が、身を亡ぼす悪魔の毒とも気がつかない。こうなると、かげでは袂ひき目ひき、悪口かげ口は言つても、面と向かつて言つてくださる善知識は一人もない。善知識も、招喚の親もない。灰色の大地に迷うておるとも気がつかない。」

甲「まことにおそろしい世界にとどまつていたものでございます。」

乙「お浄土はまだ見ぬ国ではある。しかし、それが彼岸といわれるゆえんは、此岸、すなわち人生の全体が此岸に生かされるのであります。言いかえると、真人生の根底となるのが、十八願の真仏真土であります。浄土が十万億土を超越するということは、里数の隔りでもなく、時間上の距離でもありません。人生と浄土とはなんらの関係なく、墓場とお浄土と結ぶのが十九願二十願の世界、十八願の浄土は、現実の生死界に深い関係をもつて働く浄土であります。ですから、生死界が生死界として体験される時、浄土は現実のまつただ中に君臨して、大信海として体験されてきます。無限の未来をはらむから、歓喜があり、懺悔があり、過去の遠劫の因縁が生かされるから慶喜します。三世にわたつて、業障消滅の鐘が鳴りひびきますから、はじめて無碍の大道、不断煩惱得涅槃と救われます。相對の善悪を超えて絶対の善、南無阿弥陀仏がわれらの人格内容となります。ここに人格の大革命は如来によつて成就し、如来は現在から未来に未来から現在に、無限に、果より因に、因より果にと、往相還相、二廻向を私どもの上に生かしきります。法蔵の願心において、われらの生きるということはありえない。まったく身も心も、仏凡一体であります。」

甲「やれやれ生活と信仰が一つだの二つだの言つたことさえおはずかしいと存じます。」

乙「だが、俺は信仰生活がりつぱにできているぞ、などとうぬぼれたら、すでに火は消えています。ただ限りなき闇の深さと、如来の大慈悲智慧光の深さを仰ぐべきであります。」

甲「そのへんの心地もわかつてきました。まったくこれからです。聞かしていただく心持がまったく違つてまいりました。」

乙「生きる道に完成はありません。大満足の中に、いよいよこれからです。」